

漫画『逃げるは恥だが役に立つ』にみる夫婦像

The image of husband and wife depicted in the *manga* “The Full-Time Wife Escapist”

清水 美知子*

Michiko SHIMIZU

Abstract

This paper considers the image of husband and wife depicted in Tsunami Umino's *manga* “The Full-Time Wife Escapist.” In this manga, Mikuri and Hiramasa, who met through Mikuri's job with a housekeeping service, decide that it would be mutually beneficial to enter into a de facto marriage through an employment contract. While at first the pair only went through the motions of being husband and wife in a businesslike manner, as they live together over time they gradually fall in love and become a true married couple. This work chiefly differs from other love-story manga on the theme of marriage in the developments it describes after the two fall in love. The first thing Mikuri says when Hiramasa proposes marriage is, “You'll pay me for housework, right?” Here Mikuri shows that she is unwilling to do for free, as a wife, the housework that she had been paid to do as an employee. Ultimately, the pair chooses a path in which both spouses work, while sharing responsibility for managing the home. It should be noted that this is a through adjustment of the relationship between Mikuri and Hiramasa. The ties between the two grow deeper as they come to respect each other as equal partners, think about what truly is important, and discuss things thoroughly, seeking consensus.

キーワード：逃げるは恥だが役に立つ, 漫画, 契約結婚, 家事労働, コンフルエント・ラブ

I はじめに

1. 恋愛・結婚をめぐる若者の意識

「20代若者のデート経験なし4割」「30代未婚者は4人に1人が結婚願望なし」。2022年6月, そんな内閣府の調査結果^{注1}が大きな話題になった。テレビやインターネットのニュースで取り上げられ, SNSでも「デート経験なし」がトレンド入りするほどであった。

「令和3年度 人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査」(令和3年度内閣府委

* 関西国際大学 社会学部

託調査)は2021年12月～2022年1月にかけて、国内在住の20歳以上70歳未満の男女2万人を対象にインターネットで実施された。これまでの恋人の人数をたずねたところ、20～39歳の未婚女性は24.1%、同男性は37.6%が「恋人として交際した人はいない」と回答した。特に20代男性では交際経験がない者が4割近くにのぼった。また、結婚に対する意思についてたずねると、「できればしたくない」「したくない」という回答は、20代では女性14%、男性19.3%だったが、30代になると女性25.4%、男性26.5%と、4人に1人が結婚したくないと答えた。「結婚意思なし」に「どちらでもいい」という回答を加えると、その比率は30代では男女とも半数を超える¹⁾。こうした数字が多くの人には驚きを持って受けとめられたのであろう。

しかし、国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」によれば、婚約者・恋人がいる未婚者の割合は、1982年以降おおむね女性30%台、男性20%台で推移している。データからみる限り、日本の場合もともと男女交際があまり活発とは言えない。最新の「第16回出生動向調査」(2021年)の結果をみると、18～34歳未婚者のうち異性の交際相手を持たないのは男性72.2%、女性64.2%であった。その中でも「とくに異性との交際を望んでいない」と答える人が増え、男性・女性とも3分の1が「交際を望まない」と回答している。また、過去に異性との交際経験がない未婚者が、男性の40.0%、女性でも34.9%を占めている²⁾。

昭和時代はある程度の年齢となると職場や親戚、友人・知人の紹介等により、結婚相手の候補となる異性に会える機会が少なくなかった。ところが時代が下るにつれて、恋愛も個人のコミュニケーション力に依るところが大きくなった。恋愛で結婚する人が9割を超える現在、恋愛のハードルは高く、異性の友人や恋人、すなわち結婚相手の候補がいらない若者が増加していると考えられる。

先の内閣府調査では「積極的に結婚したいと思わない理由」についても複数回答で質問している。最も多かったのは「結婚に縛られたくない、自由でいたいから」(男性37.0%、女性48.9%)、次いで「結婚するほど好きな人に巡り会っていないから」(男性36.2%、女性48.8%)であった³⁾。

独身生活のよさを楽しみながら、条件を整えればいずれかの時点で、あるいは理想的な相手が見つければ結婚へ移行すればよい。結婚したくないわけではないが、する／しないは場合による。上述の調査結果からは、このような価値観をもつ若者像が浮かび上がってくる。

2. ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』の大ヒット

恋愛結婚が難しいという世相を反映して、大ヒットしたテレビドラマがある。2016年10月から12月にかけてTBS系列で放映されたラブコメディ『逃げるは恥だが役に立つ』(全11話)、略して『逃げ恥』である。

主演は新垣結衣と星野源。物語は派遣切りにあい職を失った独身女性(新垣)と、家事が苦手な恋愛経験なしの独身会社員(星野)が、「家と仕事がほしい」「家事をしてくれる人がほしい」という利害関係で結ばれ、家事代行サービスの契約を経て「契約結婚」するところから始まる。仕事として割り切ったはずのふたりの関係が、ひとつ屋根の下で暮らすうちにいつしか恋愛に発展していく。好意を持ちながらもなかなか接近しない「ムズキュン」と呼ばれる展開にくわえ、登場人物のセリフが身近な社会問題について鋭く指摘していることから「社会派ラブコメディ」として注目された。

このドラマは、後半になるにつれて盛り上がりを見せ、最終話の視聴率は20.8%を記録するヒッ

ト作となった（ビデオリサーチ・関東地区平均）。とりわけインターネットでの反響が大きく、番組のエンディングで出演者たちが踊るダンスは反響を呼び、芸能人やアスリートをはじめさまざまな人が「踊ってみた動画」をアップした。また、恋愛関係の進展に一喜一憂する視聴者の投稿がSNSに数多く見られるといった現象も起きた。そして、番組終了前から「逃げ恥ロス」という言葉が生まれるほど人気を博したのである⁴⁾。2021年1月には、連続ドラマの“その後”を描く『逃げるは恥だが役に立つ ガンバレ人類！新春スペシャル』が放映され、同年5月、夫婦役で共演した新垣と星野が結婚を発表、「逃げ恥婚」として話題となった。

ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』の原作は、海野つなみによる同名漫画である。ドラマ版『逃げるは恥だが役に立つ』は、世の中に対する批判的な視点を持ちながらも、恋愛要素が強めで、主演ふたりが出会いによって変わっていく様を中心に描かれている。登場人物の感情の揺れもストレートで分かりやすいことから、幅広い視聴者層の心をつかんだ。これに対して原作漫画は、物語のトーンが理性的で淡々と進むのが特徴である。基本的にはラブコメディだが、描かれる悩みは切実で、作品じたいが一種の思考実験となっている。すなわち、登場人物の思考を言語化し、さらにその状況を整理する会話やモノログが続いていくという、テキスト漫画的な側面を持っているのである。

本稿では、漫画版『逃げるは恥だが役に立つ』をテキストとして取り上げる。筆者がこの作品に注目するのは、少女漫画の王道であるラブコメディのフォーマットをとりながら、現代の若者が抱える葛藤や困難を正面から取り上げた点である。本稿では『逃げるは恥だが役に立つ』に描かれた夫婦像を通して、現代社会における結婚の意味や家事分担について考えたい。

Ⅱ 漫画『逃げるは恥だが役に立つ』の概要

1. テーマは「仕事としての結婚」

『逃げるは恥だが役に立つ』は、講談社の漫画雑誌『Kiss^{注2)}』にて2012年22号から連載を開始、2017年2月号まで続いた（43話と番外編）。その後、ドラマ化され人気を博したこともあり、読者からの要望に応える形で続編が2019年3月号から連載を再開、2020年4月号に完結している（全11話）。単行本は第1巻が2013年6月に講談社の漫画単行本「コミック Kiss」より刊行され、最終刊である第11巻が刊行されたのは2020年4月である。2021年5月時点で、全11巻のコミック累計発行部数は電子版を含めると450万部を突破している⁵⁾。

図1は、単行本の第1巻と第10巻の表紙である。各巻の表紙カバーには、本作に登場する諸テーマが列挙されている。たとえば、「就職難」「派遣切り」「晩婚化」「少子化」「事実婚」（第1巻）を見ても、インターネットや新聞・雑誌の紙面を賑わせているようなキーワードが並ぶ。

作者である海野つなみは、1970年生まれの漫画家で現在53歳。1989年に『お月様お願い』で講談社「第8回なかよし新人まんが賞」に入選し、漫画家としてデビューした。『逃げるは恥だが役に立つ』は2012年の連載当初から、「就職としての結婚」「仕事としての家事」という新規性が話題になった。2014年7月には女性誌『FRaU』の第2回マンガ大賞に選ばれ、2015年5月には第39回講談漫画賞を受賞している。

本作の着想について海野は次のように語る。「次の作品は何を書こうかなと担当編集と相談しているときに、私がぽろっと『契約結婚ものなんてどうですか？』って言ったんです。そしたら



図1 『逃げるは恥だが役に立つ』第1巻と第10巻の表紙カバー
©Tsunami Umino 2013 ©Tsunami Umino 2019

担当編集が『いいですね、それ!』ってすごく食いついてきて。どうやら担当さんは、玉の輿にのるためにお金持ちの男の人と結婚をして、その後本当に相手のことを好きになってしまうような、少女漫画の王道ストーリーを想像していたようなんです。でも、私は全くその気はなくて。あくまで「仕事としての結婚」というつもりでした。だから、極端なことを言えば、その後ふたりが恋愛関係に発展するかどうか考えていなかったんです⁶⁾」(傍線引用者)。

ではいったいなぜ、「仕事としての結婚」を描こうと思ったのか。この点について、海野はインタビューにおいて次のように答えている。

結婚は恋愛として考えるより、仕事として考えたほうがうまくいくのではないかと思ったんです。恋愛だと、お互いに相手に対する期待があり、知らないうちに社会から背負わされたそれぞれの役割を演じないといけない。そのため、相手が言わないことまでやらなきゃいけないし、やりすぎたら怒られる。それでもお互い余計なことを言って嫌われたくないから、なかなか話し合いができない。でも仕事だと思えばビジネスライクに言えますよね。また、多くの人が大恋愛して結婚するのが素晴らしいと思わされているけれど、そうでしょうか? 例えば親友は、学校でたまたま出席番号が近かった子だったのが、仲良くなって気がついたら30年も付き合っていた、ということがあると思います。結婚も生理的にいやじゃなくて、気が合って、一緒に暮らしていてある種の愛情が芽生えるなら、それは素敵だと思う。そのほうが選択肢も広がります⁷⁾。(傍線引用者)

「契約結婚」じたいは、少女漫画によくあるモチーフである。そこに「就職としての結婚」「仕事としての家事」という切り口でビジネス物のような要素を入れて描いてみたところ、女性からは「私も契約結婚したい」「雇ってほしい」、男性からは「こんなの男に都合が良すぎる」「こん

な結婚したい」といった感想が数多く寄せられたという⁸⁾。男女のニーズが、意外にもマッチングしていたのである。

『逃げるは恥だが役に立つ』という風変わりなタイトルは、ハンガリーのことわざ“Szégyen a futás, de hasznos”^{注3}の和訳である。逃げたり退いたりするのは恥のようだが、長い目で見れば得策になることもある、という意味で使われている。なお、本作では全54話にサブタイトルがついており、それらも国内外のことわざや故事成語、四字熟語が使われている。

2. 登場人物とあらすじ

2.1. 登場人物と物語の構成

物語の主人公は、森山みくり(以下、みくり)。両親と実家暮らしの25歳。大学では成績優秀だったものの就活はうまくいかず、大学院に進学して臨床心理士の資格を取得したが、就職試験では再び全敗。やむなく派遣社員として働くも、派遣切りにあつて職を失う。仕事の手際がよく気も利く反面、思い込みで先走り、失敗することも多い。恋愛経験は、大学時代に彼氏がひとりいたのみ。しかも、元カレから言われた「小賢しい」という言葉が、自覚のないまま呪縛となっている。実用的かつ斬新なアイディアが豊富だが、他の人には考えられないような発想で周りを驚かせることもある。心に引っかかったことをそのままにできないタイプである。

主人公みくりの相手役となるのは、津崎平匡(以下、平匡)。京都大学卒の36歳で、IT会社に勤務するシステムエンジニアである。人づきあいが苦手で気難しい性格。特に女性に対する苦手意識が強く、傷つかないように壁を作り、相手を遮断する。たとえ恋に落ちてでもそれ以上の発展を望まない自称「プロの独身」である。ただし、ポーカークフェイスを装っているが、心の中では激しく動揺していることも多い。

ふたり以外の主要な登場人物としては、みくりの伯母で独身キャリアウーマンの土屋百合(以下、百合)、平匡の同僚で女性にモテるが結婚には懐疑的な風見涼太(以下、風見)、同じく平匡の同僚で同性愛者の沼田頼綱(以下、沼田)、みくりの中学時代の同級生でシングルマザーの田中安恵(以下、安恵)など。個性的なキャラクターが多数登場し、物語に多層性を与えている。

『逃げるは恥だが役に立つ』の物語は大きく、①第1話～第43話(単行本第1巻～第9巻)、②百合と風見を主人公とした番外編(単行本第9巻所収)、③第44話～第54話(第10巻・第11巻)の3つに分かれる。本稿では便宜的に①を「正編」、③を「続編」と呼ぶ。「正編」では、みくりと平匡の出会いから事実婚をへて法律婚(婚姻届の提出)に至るプロセスが描かれる。「続編」では、婚姻届を提出して2年半後から物語がスタートし、みくりの妊娠・出産を経て育児休業終了までの生活が描かれる。以下では、正編と続編のあらすじを、みくりと平匡の関係に焦点をあてて紹介しよう。

2.2. 正編(第1話～第43話)のあらすじ

主人公のみくりは、大学院を終了したが就職活動はうまく行かず、派遣社員となるも派遣切りにあつて、現在は求職中の身の上である。見かねた父親のはからいで、父の元部下^{注4}であった会社員・平匡の家事代行を請け負うことになる。時給は2千円で週1回3時間。正社員の仕事が見つかるとのアルバイトのつもりであった。

平匡の信頼を得て、仕事にやりがいを感じたのもつかの間、みくりは同居していた両親の転居

により家事代行を辞めざるを得なくなる。見知らぬ田舎に引っ越せば就職口を探すのも難しい。さりとて、都会でひとり暮らしをしては家賃や生活費でやっていけない。窮地に陥ったみくりは、平匡に「就職として結婚するのはどうでしょうねえ」と持ちかける。就職としての結婚。みくりの突拍子もない提案に戸惑いを隠せない平匡だったが、調べてみると経済的にもメリットがあると分かり、婚姻届を提出しない事実婚でならと承諾した。

「就職としての結婚」を始めるにあたり、ふたりは契約を取り交わす。家賃・食費・光熱費は折半で、冠婚葬祭など夫婦として出席しなければならないときは時間外手当をつける。寝室は別とし、性的な関係は持たない。恋人はお互いつくってもよいけれど、世間体を考えて極力見つからないようにする等など。出会いから2カ月目のことだった。

周囲には真実を伏せ、契約結婚をスタートさせたふたり。両家顔合わせの席上、会話の流れから平匡に恋愛経験がないことが明らかになる。一度も性交渉を持ったことのない高齡童貞である。

雇用主と従業員としての関係はきわめて良好であった。みくりの働きにより平匡は快適な生活を手に入れ、両親を安心させることもできた。一方、職探しの不安から解放されたみくりも、平匡からの仕事に対する感謝や肯定的な言葉に喜びを感じていた。しかし、表向きには本物の夫婦として振る舞わねばならないのに、ふたりの間にはどこか他人行儀なよそよそしさが漂う。平匡の同僚の沼田や風見、みくりの伯母・百合からは、「仮面夫婦」と疑いの目を向けられてしまう。

周囲の目をごまかすために、ふたりは夫婦らしさを演じることにした。ところが、ふたりの距離が近づくにつれて、平匡は心の平穏を保てなくなる。みくりに対し従業員以上の好意を持ち始めたからである。そんな中、契約結婚であることが平匡の後輩である風見にばれた。ふたりの関係に興味を持った風見は平匡に「みくりさんをシェアしたい」、すなわち自分も家事代行を頼みたいと持ちかける。少しでもお金を稼ぎたいみくりは、副業で風見の家事代行も始める。平匡はみくりに風見の話を家に持ち込むなどと言いつつ、内心は気になってしかたがない。平匡は意に反してみくりに冷たく当たるようになり、ふたりの関係はギクシャクしてしまう。

この状況はまずいと感じたみくりは、平匡との距離を縮めるために「恋人感を醸し出すこと」を提案する。難色を示す平匡だったが、折しもみくりが風見の家に出入りしていることが百合にばれてしまい、取り繕うために「役割としての恋人」を演じることに同意する。「恋人の定義とは何か」と問う平匡に、みくりは「スキンシップ」と答え、「ハグ」が最もハードルが低いと主張した。ふたりは手始めにハグしてみるが、お互いの温もりを感じてドキドキしてしまう。そして、あくまでも雇用主と従業員の関係を維持するために、「ハグの日」は月に2回^{注5}と決める。ハグの効果は絶大で、平匡はこれまで風見に感じていたイライラが消えるのだった。

恋愛感情が芽生えた平匡は悩んでいた。ハグの「先」に進みたい衝動に駆られる一方で、フラれて傷つくのを極端に恐れていたのである。クールな表情とは裏腹に力強く抱きしめたり、突然キスをするなど平匡の想定外の行動に驚きつつ、みくりも恋をしている自分に気づく。そして、奥手な平匡をみくりがリードする形でふたりは結ばれる。出会いから1年2カ月目のことであった。

本物の恋人関係になってまもなく、平匡は「籍を入れませんか」と提案した。事実上のプロポーズである。風見の家事代行はやめてほしいと言われたみくりは、入籍後の家事とその対価のことが気になりはじめる。転職が決まった平匡は、入籍話をどんどん進めようとするが、みくりは気持ちの整理がつかない。ついに、仕切り直しのための「別居」を願い出た。

みくりは百合の家に居候しながら、友人・安恵の祖母が経営する八百屋の店番を始めた。商店街の青空市の手伝いも副業として加わり、週末も平匡の家に帰れず、一緒に過ごす時間はなくなった。みくりに逢えない平匡はひとり悩み、彼女がプロポーズをためらうのは、契約内容に問題があるからだと考えるようになる。青空市の終了後、ふたりは久々に一緒に過ごす。みくりは平匡に、就職が決まったら入籍するのでそれまで待ってほしいと告げる。

ようやく契約社員としての採用が決まり、みくりは平匡の家へ戻った。入籍は、みくりが正社員になる3カ月後と決まった。平匡は、ふたりの関係はもはや雇用主と従業員ではなく「共同最高経営責任者」であると主張、新たなルール作りを提案する。ところが、新ルールを試行してみると家事分担がうまく行かない。ふたりは話し合いを重ね、家事は役割と義務ではなく、好意と感謝で生活を回していこうと決める。出会いから2年8か月目の6月、ふたりは婚姻届を提出し本物の夫婦となった^{注6}。

2.3. 続編（第44話～第54話）のあらすじ^{注7}

婚姻届を提出してから2年半後、みくりは30歳を迎えようとしていた。家事は分担制。洗濯物干しや週末の夕飯づくりは、今は平匡が担当している。正社員として働くみくりの目下の悩みは、子作りのタイミングだった。ある日、みくりの妊娠が分かった。妊娠の報告を受けた平匡の淡白な反応に、みくりは軽いショックを受ける。

出産予定日も決まり、少しずつ親になる実感がわいてきたふたり。しかし、みくりは「つわり」で食事もとれない。家の中は荒果て、家事の負担は平匡にかかり、分担どころでない。良き夫でありたいという思いが空回りし、ふたりの関係はギクシャクしてしまう。平匡は会社に妻の出産時に育児休業を取得すると伝えた。育休期間が1か月と聞いたプロジェクトのリーダーからは「男が育休ととってもやることない」「1週間が妥当」と言われ、男性に育児は想定されていないことを痛感する。

妊娠後期に入り、みくりに再びつわりの症状が出るようになった。産休に入ったが寝たり起きたりの生活。家事もこなさねばならない平匡はイライラが募り、みくりに対して感情的に当たってしまう。

妊娠39週と6日目、みくりは無事、女兒を出産した。初孫の顔を見に訪れた平匡の両親は、「平匡が1か月も育休取って役に立つのか」と心配する。これに対してみくりは「育休は休みではなく試行・実践・訓練期間」、平匡も「生活が破綻しないようリスク分散が大事」と答え、協力して育児を行うと宣言する。1か月後、平匡は会社に復帰した。その2か月半後、子供を保育園に預けてみくりが職場復帰し、入れ替わりに平匡が2度目の育休を取得した。

それから1か月、明日から平匡もいよいよ職場復帰という夜、みくりと平匡は本格的な共働き生活を前に、出産後の半年あまりをふり返り、今後のことを話し合う。「お疲れさまでした。明日からまた頑張りましょう」と、ふたりは久々に「ハグ」をするのだった。

Ⅲ 『逃げるは恥だが役に立つ』にみる夫婦像

『逃げるは恥だが役に立つ』の正編は、従業員と雇用主として出会ったふたりが、お互いの利益のために愛情抜きの事実婚を選択し仮面夫婦になるものの、一緒に暮らすうちに恋愛感情が芽

生えて恋人関係となり、やがて本物の夫婦になるまでを描いた物語である。

この作品が「結婚」をテーマとした他の恋愛漫画と大きく異なるのは、ふたりが本物の恋人として結ばれたのちの展開である。それは物語の中盤（第6巻）、平匡が入籍を提案するくだりで現れる。少女漫画の常識では、プロポーズはハッピーエンドにはかならない。ところが本作では、平匡のプロポーズに対し、みくりは開口一番「お給料はどうなるのでしょうか？」と水を差すような言葉を投げかける（第28話、傍線引用者）。

結婚すると家事には賃金が支払われないの？ 入籍後の家事は誰がどのようにするの？ 家事労働の対価と家事分担をめぐる問題はその後、物語の終盤まで延々と続く^{注8}。分量にすると正編の3分の1を超えており、作者がいかにこの問題を重視していたかが伺える。以下では、事の発端から収束に至るまでを、正編（第1話～第43話）の物語に沿って見ていくことにしよう。なお、会話部分は単行本『逃げるは恥だが役に立つ』からの引用であり、読みやすくするために適宜、句読点をつけている。

1. 家事労働の対価は？

入籍の話が出てまもなく、平匡はみくりをデートに誘った。通いの家政婦から始まって、就職として住み込みの妻となり、両想いになってからも外で逢うこともなかったため、ふたりにとって初めてのデートである。しかし、平匡の心遣いに感謝しながらも、みくりは家事労働の報酬のことが気になって仕方がない。レストランでの食事中ついに「平匡さん、籍を入れるってことは仕事としての家事はどうなるんでしょうか。っていうか、お給料はどうなるんでしょうか」と切り出した。そして、「よかった。入籍なんてって言われるのかと思った」と安堵する平匡に、「嫌なわけじゃないですよ！ ただ、わたしは仕事として家事代行を自分なりにいろいろ工夫してやってきたので、お金をもらう以上、掃除も計画的にきっちりこなし、料理も失敗したら作り直し、それが無償で同じクオリティでこれからやってってことになっちゃうのかなって…それはちょっとハードルが高いなって…」と抗議したのである。無償で家事のクオリティが下がるか、有償で今の状態を保つか。二者択一を迫るみくりの勢いに押され、平匡は「有償で…」と答えざるをえなかった。ところがその晩、平匡がみくりの心を乱すことを言い出した。「今までどおりの時給制もいいんですけど、将来のことを考えて、お互い定額制のお小遣いにして余った分は貯金に回しませんか」。（第29話、傍線引用者）

時給はやめて「固定給」にとの提案に、みくりはショックを受けた。今までと同じ仕事量を少ないお金でやれとは、ブラック企業ではないか。「まあちょっと考えてみてくださいね」という平匡に「はあ～」と答えつつ、みくりは悶々としていた。モノローグで次のように心情を吐露している。

プロポーズを受けた後で内容変更ってずるくないですか…でも、平匡さんの言ってることが間違ってるかといえばそうではない。一般的にはそういうものだと思う。…（中略）…自分が「男の役割」を期待してるんだから向こうだって「女の役割」を期待するよ。それなのに自分ばかり「働いた分、お金くれないか」とか言いづらい。このまま普通に結婚するべきなのか。うるさく言って嫌われたくないよ。あなたのこと大好きなの。ああ、でもどうにもこうにももやもやするよ～！（以上第29話、傍線引用者）

これまでは、雇用主と従業員という関係で割り切ることができた。それが真の結婚へと移行すると、同じ負担でありながらも、家事労働がなぜ有償から無償に変わるのだろうか。納得がいかない。従業員として有償で提供する家事と、妻として無償で提供する家事は同じには扱えないのは当然ではないか。だからこそ、これからも同じレベルで家事をやってね、愛があるならやれるでしょ、となりそうなところで、「ちょっと待った！」と異議を唱えたのである。

2. 愛があれば入籍すべき？

「入籍」のことで頭がいっぱいの平匡は、みくりの葛藤に気づかない。折しも、平匡に転職の話が持ち上がる。正式な結婚に向かって突き進む彼は、転職を機により便利なところへ引っ越し、住民票を移すのと同時に籍を入れようと促した。以下、平匡の提案とそれに対するみくりの反応である。

平匡：それですね。転居でどうせ住民票を移すなら、もうこれをきっかけに籍を入れませんか。

みくり：え！

平匡：事実婚を続けるならば、また住民票に「見届けの妻」で提出する必要があります。だったらいつそのタイミングでもう籍を入れてしまいませんか。

みくり：ええっ！

平匡：婚姻届ももらってきました。問題は証人の欄なんです、僕らが事実婚だということを知っているのは風見さんだけです。でも実は沼田さんも仮面夫婦だということにどうやら気づいているみたいなんです。ですからこの際、すべて話して2人に証人になってもらうのが一番いいかなと思っているのですがどうでしょう。

みくり：ちょちょちょっと待ってください。いろんなことが矢継ぎ早に起こって、ちょっと気持ちの整理が。

平匡：すみません。じゃあ整理して順番にやっていきましょう。まず入籍。

みくり：いやいやいやいや！

平匡：それから引っ越し。

みくり：ひ、平匡さん。すみません。ちょっと…限界です。ちょっと距離を置いてもらえませんか…。

平匡：あ——！！それはつまりおまえとは一緒にいられないから別れようっていう意味ですか！意味ですね！？

みくり：ちっ違います、違います！とりあえず1カ月ください。私その間、百合ちゃんところへでも泊めてもらいます。ちょっと自分の人生見つめ直したいんです。

平匡：それって…

みくり：あっ、でも家事をしにはきます！前みたいに週1で3時間でもいいし、風見さんところみたいに週2でごはんつきでも構いません。

平匡：だったら今まで通り一緒に暮らしてもいいんじゃないですか。

みくり：ちょっと一回離れて考えてもいいですか…すみません…

平匡：結局、みくりさんの心は僕から離れていったということですね。

みくり：あーそうじゃなくて——！ 仕切り直しです。別々に住んで週末は一緒に過ごして、デートしたり家でまったりしたりしましょう。普通の恋人同士です。（以上第31話より、傍線引用者）

平匡の言うことが合理的なのは、みくりも承知している。しかし、入籍後の家事がどうなるのか曖昧なままで、普通の結婚に踏み切ってよいのか。平匡に従うことがいちばん上手く行く方法なのか。いや、それはできない。流されて結婚するのが怖くてみくりは「別居」、すなわち平匡から「逃げる」という強硬手段に出た。平匡は、みくりの真意が理解できず、拒否されたとショックを受ける。

3. 別居から見えてきたもの

ふたりの別居生活が始まった。みくりは平匡の家に通って有償で家事を行い、週末は婚約者として一緒に過ごした。ある日、ふたりは一緒に買い物に行き、平匡の家で餃子をつくることになった。みくりは餃子の包み方を平匡に教える。ひとつ屋根の下で暮らしていたのにもかかわらず、これまで恋人同士らしい食卓はなかった。一緒に料理をつくるのは楽しい、とふたりは実感する。

食後、「あ〜ビール飲んだら眠くなってきちゃった」というみくりに、平匡は「後片付けはいんですか」と声をかけた。みくりの「今日は仕事じゃないんです〜」という返事に平匡はドキッとした。後片づけはみくりにやってもらって当然と思っていたからである。「どういうやり方が2人にとって一番良いのか、僕もこの1カ月で考えてみたいと思います」と平匡は心の中でつぶやいた。

別居により平匡の心境にも変化が現れはじめた。そして、「みくりさん、もやもやをごまかしてしまわないでください。そういうのはつもり積もっていつか必ず表面化します。僕にできることが待つことなら、みくりさんが答えを出すまで待ちます」と伝えたのだった。（第32話、傍線引用者）

一方、1カ月近くが過ぎ、みくりも自分が何を望むのかぼんやりと見えてきた。家事代行の仕事で風見の家を訪れた際に、風見から「結論は出たんですか」と問われ、「私はやっぱり自分の収入が欲しいので働きたいんですね。家事を仕事にしているからややこしくなるなら、いっそ別の仕事したほうがいいんじゃないかと思って。でもそうになると家事は誰がやるんだって話ですよね。今まで全部仕事として私がやってきて、共働きになったから平匡さんもやってってそうすりなりいくのかどうか」と答えている（第33話、傍線引用者）。

無償で家事を行う専業主婦には絶対になりたくない。ならば、自分も家事以外の仕事を持ち、共働きにシフトチェンジすればいいではないか。みくりの考えが変わりはじめる。

別居生活1カ月になる頃、みくりは中学時代からの友人・田中安恵から、祖母が営む八百屋を手伝ってほしいと頼まれる。別居は延長となった。八百屋の店番をしていると、店づくりのアイデアが次々と浮かんできた。元気のない商店街の現状を打破する策として「青空市」を提案したところ、店主たちからサポートを頼まれた。日給3千円の有償ボランティアだが、みくりはやり甲斐を感じていた。青空市の準備で忙しくなり、別居は再延長となった。みくりに会えない平匡はひとりで悩み、彼女が入籍を躊躇するのは、契約内容に問題があるからだと真剣に考えはじ

めた。

青空市は無事終わり、みくりは久々に平匡と共に週末を過ごした。そして、就職が決まったら平匡のもとに戻ると告げる。青空市の仕事に派遣事務や家事代行では得られない楽しさや充実感を感じたみくりは、その経験をもとに就職活動に乗り出した。もっとも、正社員の経験がないという理由で不採用が続く。手持ちはあと一社。心が折れそうになりながらも、「どんな職でもいいじゃない…希望の職種にこだわって今まで自爆してきたんだし。どんな仕事も身になるし、どこに仕事の糧が転がっているかわからないんだから」と自らを奮い立たせた。そして、ようやく契約社員ではあるが就職が決まったのである。

採用の報告をした日、「ここに戻ってきて一緒に暮らし、3カ月後、正社員になったら晴れて入籍…ということですよね」と確認する平匡に、みくりは「はい」と答えた。プロポーズへの承諾を受けて、平匡は「ということはもう、雇い主と従業員じゃありません。共同最高経営責任者です」と告げる。新たな関係性構築の提示である。(第40話より、傍線引用者)

みくりの「逃げ」から始まった別居生活は、お互いにプラスの効果をもたらした。「仕事としての家事」に囚われていたみくりは、「共働き」という選択肢があることに気づき、就職活動に本気で取り組むようになった。一方、平匡はこれまでの思い込みによる言動を反省し、共に生きる幸せを実現するため、改めてみくり誠実に向き合っていこうと決意したのである。

4. 共働きの家事分担は？

新しいルールによる実験生活がスタートした。新生活1カ月目の最終日曜日、ふたりは経過報告会議を開いた。みくりがフルタイムで働き始めたことから、家事分担について話し合う必要が出てきたのである。「率直な感想は？」と切り出されたみくりは「もやもやしています」と答え、平匡を驚かせる。少し長くなるが、報告会議でのふたりのやりとりを紹介しよう。

みくり：平匡さんに生活費を多く出してもらって、その分私のほうが家事分担が多いじゃないですか。それには納得してるんですけど、それで平匡さんがやり忘れてたり、やるのが遅かったりすると「それそっちの分担だよね？私より家事負担少ないよね？」とってしまうことがあります。

平匡：す、すみません…

みくり：平匡さんは。私も言ったので正直なご意見お願いします。

平匡：そうですね。この報告会議は共同生活におけるバグを見つけ、より良い方向に修正するのが目的なので、ここは正直に言いますね。僕は、みくりさんの掃除の質の低下が気になっています。

みくり：…平匡さん。私もね、この1カ月で改めて思ったんですよ。仕事としてお給料をもらってやる分には、掃除はちゃんとやるし、綺麗になると達成感もあるんですけど、日常生活において私、たぶん平匡さんより部屋が汚れてても気にならないんですよ！

平匡：ええ——！

みくり：そもそも平匡さんはお金出して家事代行を頼んでたくらいですから要求水準が高いんでしょうね。

平匡：まあそうですね…そうかもしれません…。

みくり：汚れていると思ったら、自分でやってくれてもいいんですよ。

平匡：自分の分担のところはやりますけど、みくりさんの分担だったので…。

みくり：…「分担」…さっきからよく出てくるキーワード「分担」…分担って実は結構やっかいじゃないですかね。やって当たり前になって、できないとイラッとするっていうか…しかもそんなできてない基準は自分の中の採点で相手にはわからないっていう。

平匡：うーん…

みくり：いっそ役割分担をやめてしまいませんか？ 自分のことは自分でやるんですよ…シェアハウスですよ！

平匡：シェアハウスこそきっちり分担じゃないですか？

みくり：んーていうか、2人でするひとり暮らしって感じ？ 1人でもご飯を作ったり部屋を掃除したりするでしょ？ だからついででいいのなら基本家事は私がしますが、それはあくまで好意です。

平匡：そんなのみくりさんの負担が大きいじゃないですか。

みくり：仕事じゃないんで、あーもう今日ごはん作れないって思ったら作らないし、自分でいやと思ったら掃除はしません。そこはひとり暮らしの時と一緒です。だから何も言われなければどちらも食事は自分でなんとかしてほしいし、そっちが汚れていると思ったら、何も言わず自分で掃除してほしいです。ごはん多めに作っても、共用部分を掃除しても、それは別に役割じゃなくてただの好意なんで。あくまで好意だから、できてなくても「ごはんは？」とか「汚れてるよ」とか言わないでほしい。家事は私の仕事じゃないから！ あ——…

平匡：みくりさん？

みくり：そもそも「家事は仕事」から始まったのに、最終的に出た結論が「家事は仕事じゃない」っていう…

平匡：でもやっぱりフェアじゃないような気がします。時間的にもスキルのにもみくりさんに負担が多くなるんじゃないですかね。

みくり：だったらどうします？

平匡：え？

みくり：シェアハウスで同居人が好意でご飯作ってくれたりしたら、平匡さんどうします？

平匡：うーん…お礼言って…なんか美味しいもの買ってくるとか…ちょっと多めに生活費出したり…自分にできる雑用引き受けたりとか…？

みくり：そういうことですよ！ そういうことしてくれたら嬉しいですよ！

平匡：感謝の気持ちを行動で伝えるということですね。

みくり：正直、今、生活費を多めに出示してもらってるけど、私のほうが家事分担多いから当たり前って思って、あんまり感謝ないですからね。

平匡：あー…最初から分担になってしまうと感謝がなくなって当たり前でしょって思ってしまうのか…なるほど、役割と義務ではなく、好意と感謝で生活を回していこうということですね。

みくり：じゃあ同居人設定でいろいろ見直していきましょう。(以上第42話より、傍線引用者)

新生活でみくりを悩ませたのは家事の「分担」であった。「分担」は効率がよく合理的と思わ

れるが、担当者にとっては実は厄介である。分担だからやるのが「当たり前」になると、やってもらっているという意識が失われ、ありがたみが感じられなくなる。しかも、できている／できていないの基準には個人差がある。できていないと気に障り、自分の基準を強要するようになる。反対に、相手から要求水準を押しつけられると、自分に「分担」が偏っているのでは…と被害者感情も出てくる。

役割や義務に囚われると、良好な関係は築きにくい。そこでみくりが提案したのが、自分の家事は自分でやるシェアハウス型の暮らし方だ。役割を固定化せず、相手の分もやってあげるという「好意」と、やってもらったという「感謝」で生活を回そうというものである。

ふたりは「最高経営責任者（CEO）」として、今後も生活について話し合い、そのつどお互いが楽になるよう最適化していくことで合意した。平匡はこれまでをふり返り次のような感想を述べている。「僕たちはこの家庭という場所を共同して運営していく共同責任者なんですから。僕たちは雇用主と従業員というところから始まりましたが、お互いが働いていて対等な立場での結婚というのは、ある意味、起業かもしれませんね（第42話、傍線引用者）」。

Ⅳ おわりに

『逃げるは恥だが役に立つ』は「就職としての結婚」「仕事としての家事」という切り口で夫婦関係をとらえ、女性が無償で家事労働を担うことの矛盾を浮き彫りにしたという点で、画期的な漫画であった。この作品に通底しているのは、“固定観念にとらわれない生き方”であろう。作中には、家事労働や恋愛・結婚をめぐるさまざまな思い込みと、それら呪縛から解放放たれるプロセスが丁寧に描かれている。以下では、この作品に込められたメッセージについて考えてみたい。

1. 家事＝無償労働への疑問

『逃げるは恥だが役に立つ』は主婦が行う家事＝無償労働への疑問を、ラブコメディの形をとりながら突きつけた。みくりの「お給料はどうなるんでしょうか」という発言は、雇用関係のなかで賃金が支払われていた家事労働が、「結婚」という制度に入るとなぜ無償になるのか、という至ってシンプルな問いである。雇われ専業主婦として行う家事は有償労働で、業務を遂行すれば賃金が支払われる。ところが、婚姻届を出して名実ともに夫婦になれば、すなわちそこに「愛」という感情が介在したとたん、家事は無償労働に転じる。愛しているなら家事をやってくれて当然だ。その点にみくりは異議を唱えたのである。社会学者の上野千鶴子は、この「愛」とは、妻が夫の目的を自己の目的として見なし、エネルギーを動員するためのイデオロギー装置と指摘している⁹⁾。

イタリアのフェミニストであるジョヴァンナ・フランカ・ダラ・コスタは、「愛の労働」という概念により、家事労働の無償性を正当化し、家事労働が労働であるという当たり前の現実を認識できなくしてしまう「愛」のイデオロギーを告発した。家事労働は「愛」とみなされることにより、質・量とも無制限の搾取を正当化される。そして、はなはだ引き合わない労働条件は結婚という「愛の契約」によって成立する。家庭とは労働搾取の場であり、「愛」は搾取された労働を神秘化するまたの名であると、ダラ・コスタは述べている¹⁰⁾。

みくりが感じた疑問は、日本においても半世紀以上も前から問われていた。1960年代前半のいわゆる「第二次主婦論争」では、主婦が行う家事という仕事は役に立つのになぜ価値を生まないのか（家事労働の無償性）」が問題となり議論が戦わされていた。1990年代後半には、北京で開かれた世界女性会議（1995年）の「行動要綱」を受けて「アンペイド・ワーク（無償労働）」への関心が高まった。1997年には、政府が家事労働をはじめとする「無償労働の貨幣評価」を発表した⁹。

『逃げるは恥だが役に立つ』では、契約上の賃金労働として主婦の役割がスタートしていたからこそ、夫婦の一方が負担を抱えることの不自然さが浮き彫りになった。この点について作者の海野つなみは「結婚すると女性は家事を多く負担しがちです。『家事は女性がやるもの』とか『夫を支えてあげたい』とか、いろいろな考えや気持ちがまざってそうになっていると思います。そこに『家事＝仕事』という視点を入れると、2人職場で1人に比重がかかりすぎなのはおかしいとなり、わかりやすい、と思ったんです¹¹⁾」と述べている。

日本社会は「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業により高度成長を成し遂げた。社会経済環境の変化とともに共働き世帯が専業主婦世帯の倍以上となった現在、無償労働である家事を女性のみが担うのはもはや時代遅れである。しかし、現実をみると、空気が悪くなる、嫌われない等の理由で、不本意ながら家事を引き受けている女性が多いのではなかろうか。だからこそ、歯に衣を着せぬみくりの物言いは読者の心に響くのである¹⁰⁾。

2. 「呪い」からの解放

『逃げるは恥だが役に立つ』では、みくりと平匡の関係を中心に、独身バリキャリの百合、同性愛者の沼田、女性にモテるが結婚に懐疑的な風見、シングルマザーの安恵など、さまざまな家族形態・結婚観を持つ男女が登場し、それぞれ仕事やパートナーの問題について思い悩む姿が描かれた。

たとえば、みくりの伯母の百合は、一度も性体験を持たないまま生理があがった50代の高齢処女で、仕事に生きがいを感じながらも、独りで生きていくことの寂しさも抱えている。そんな百合の「一度も選ばれなかったのってつらいじゃない？」という言葉を聴いて、みくりは「同じだな。百合ちゃんは結婚、私は仕事。みんな誰かに必要とされて生きていたいんだよな…」と心の中でつぶやく（第1話、傍線引用者）。みくり自身、大学院で取得した臨床心理士の資格を活かそうとするも就職活動に失敗し、派遣社員となるも派遣切りにあつて、誰にも必要とされない不安に悩んでいたからである。

定職がないことや親密な関係のパートナーがいないことは、アイデンティティの不安定さと呼び込む傾向にある。社会学者の山田昌弘は、アイデンティティ概念の創始者であるE・H・エリクソンを引きながら「社会が自分を必要としてくれる感覚は、『職業を持つこと』『結婚して家族を作ること』に集約される¹²⁾」と述べる。定職を持つと、自分が社会の中で必要かつ大切にされていると感じやすいし、お互いに選り合ったパートナーがいると、個人として自分を必要とし大切にしてくれる人があるという感覚を得やすい。アイデンティティ欲求を満たすためには、定職に就く、結婚して家族を形成することが最も一般的なのである。

みくりの不安定さは「定職がないこと」にくわえ、大学時代の失恋経験も影響している。元恋人から投げかけられた「おまえってなんでいつも偉そうなの。小賢しいんだよ（第20話、傍線引

用者)」という言葉が棘のように刺さり、心の傷＝呪いとなっていた。アイデンティティを保てず生きづらさを感じていたみくりが出会った平匡は、彼女の仕事ぶりを前向きに評価してくれた。だからこそ彼に、就職としての結婚を提案したのである。一方、平匡には恋愛経験がない。「プロの独身」を自称しているが、それは傷つくことを極端に恐れているからであり、恋愛に対する自己肯定感はきわめて低い。女性に受け入れられたことがないことが、平匡の「呪い」となっている。みくりから自分の存在を認められるのは嬉しいが、フラれるのが怖くて先へは進めず、「このまま契約恋人として疑似恋愛を味わっていたほうがいい（第21話）」と逃げてしまうのである。

青空市の終了後、久しぶりに一緒に過ごすみくりと平匡が、お互いの魅力について語り合う場面がある。「ここんこ自信がない」という平匡に対し、みくりは彼の魅力について分析した上で「私、平匡さんが自分の魅力に自信満々だったら、たぶん好きになってないですよ」とつけ加えた。一方、みくりが自分を「小賢しい」と思わないか問うたところ、平匡は「それって相手を馬鹿にする言葉ですよ。僕はみくりさんを馬鹿にしたことはないです」と言い切った（第39話）。ありのままの自分を受けとめ、好きだと言ってくれる人がある。ふたりが「呪い」から解放された瞬間であった。

本作では、みくりと平匡をはじめ登場人物がそれぞれの傷つきやすさを抱え、“承認”への希求が丁寧に描かれている。ときに「逃げる」ことはあっても、立ち止まりふり返り、また戻って先に進もうとする姿に、読者は応援したくなるのではなかろうか。

3. 決めてかからない生き方

『逃げるは恥だが役に立つ』が他の恋愛漫画と異なるのは、みくりと平匡の恋愛がきわめて理性的に繰り広げられる点である。ドラマ版の脚本を担当した野木亜紀子が「“冷静と情熱の間”とでも言いましょうか。気持ちは走って行こうとするけれど、それに対する冷静な視点も常に持ち合わせている¹³⁾」と評するように、ふたりにはロマンティック・ラブに不可欠な「熱い情熱」が乏しい。

イギリスの社会学者のアンソニー・ギデンスは著書『親密性の変容』において、恋愛・結婚・性を一体化させようとするロマンティック・ラブ・イデオロギーは、近代家族から現代家族へ移行するなかで消失する傾向にあると指摘した。代わって生まれたのが「コンフルエント・ラブ (confluent love)」¹⁴⁾。すなわち、固定的ではなく流動的な、別れては新しい出会いに合流していく愛である。コンフルエント・ラブは、丁寧なコミュニケーションにより相手を理解することに重きを置く。自律的なふたりが対等な立場で向き合い、関係を絶えず吟味することが求められるのである。

『逃げるは恥だが役に立つ』では、みくりと平匡が探り合いで互いの気持ちを確認し、対話により関係を深めていくプロセスが描かれる。そして、コンフルエント・ラブを育てるふたりの関係性を軸に展開し、結婚や家事労働の意味が問われ、最終的には家庭の共同経営責任者というパートナーシップの提案で合意する。特筆すべきは、みくりと平匡がしつこいくらい「関係調整」をすることである。出会いが従業員と雇用主という契約関係であったため、彼ら是对等な契約当事者として、互いに尊重し合い、「合意」を目指して丁寧に話し合う必要があった。それは、ふたりが恋人同士になり、婚姻届を提出して真の夫婦になってからも変わらない。目と目で通じ合うのではなく、「応酬」と呼べるような徹底的な言葉のやりとりでふたりの仲は深まっていく。み

くりと平匡はとにかくよく喋る。「愛していれば言葉は要らない」の逆を行く夫婦像の背景には、所詮は他人、違うことを考えているし簡単には分かり合えない、といった人間観があるように思える。

「正編」の終盤で、家事分担型からシェアハウス型ヘライフスタイルの移行を決めたふたりだったが、2年半後の「続編」の冒頭では、家事を分担するスタイルに戻っている。共働きを続けるうちに、その方が生活しやすいと調整がなされたのであろう。そして「続編」は、育児休業を終えて職場復帰するふたりが話し合い、今後も「逃げるときは逃げて家族にとって一番楽な道を探しながら」（第54話、傍線引用者）やっていこうと合意するところで幕を下ろす。

お互いにとって大事なものは何かをそのつど考え、関係を調整していくのがみくりと平匡の生き方だ。うまく行かないことを続けるより、方向転換するだけでスムーズに運ぶこともある。人生に対して何かを決めてかかる必要はないし、逃げることも決して恥ではない。この作品がヒットしたのも、ふたりの生きる姿勢が読者の共感呼び、多くの人に支持されたからであろう。

【注】

- 注1 内閣府『令和4年版男女共同参画白書』の特集で掲載されている「令和3年度 人生100年時代における結婚・仕事・収入に関する調査」の結果である。
- 注2 『Kiss』は「読むと恋をする」をキャッチフレーズとしており、恋愛漫画を中心に大人女性の王道を目指すという編集方針が掲げられている。掲載作品には、仕事や恋愛について、働く女性の「リアル」と「本音」を描いた作品が多く、20代から30代の女性をメインターゲットとしつつ、それ以上の年代の女性にも親しまれている。
- 注3 単行本1巻「後書き」で海野は『逃げるは恥だが役に立つ』タイトルをハンガリーのことわざと明かしている。各巻表紙には、“Szégyen a futás de hasznos”（ハンガリー語）も日本語タイトルと併記されている。
- 注4 ドラマ版では、平匡はみくりの父の「仕事の知り合い」となっていた。
- 注5 ドラマ版の「ハグの日」は週に1回となっていた。
- 注6 ドラマ版では、婚姻届は提出せず、事実婚のままで終わった。
- 注7 続編は、ドラマ版の『逃げるは恥だが役に立つ ガンバレ人類！新春スペシャル』に当たる。ドラマ版はみくりがコロナ禍で出産するなど、設定が原作漫画とは大きく異なっている。
- 注8 ドラマ版では、家事をめぐる問題は物語の終盤、第10話になって突然浮上する。
- 注9 家事労働の経済価値の算出は、政府により1997年から行われ、3つの貨幣評価法によって専業主婦の労働の貨幣評価（当時）は267万円（年収）とされた。ドラマ版では、この評価法で専業主婦となるみくりの年収が304.1万円と算出された。
- 注10 ドラマ版第10話ではみくりの「それは好きの搾取です」という発言が反響を呼んだが、これは原作にはないドラマオリジナルのセリフである。

【引用文献】

- 1) 内閣府『令和4年版男女行動参画白書』52頁、2022
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所「第16回出生動向基本調査結果の概要」25-27頁、2022
- 3) 内閣府、前掲書、54-55頁
- 4) 「『逃げ恥』ロスに備えなければ！ みくりちゃんと平匡さんをもっとずっと見ていたい」、週刊『AERA（アエラ）』12/19号、2016
- 5) 「『明治チューブでバター1/3』、『逃げ恥』スペシャルコラボ漫画&レシピ公開」『マイナビニュース』2021-5-20、<https://news.mynavi.jp/article/20210520-1891158/>（2023-7-29アクセス）
- 6) 「呪縛を解くベストセラー！海野つなみが『逃げ恥』で描いた『人の数だけある孤独』」『FRaU』12/28号、

漫画『逃げるは恥だが役に立つ』にみる夫婦像

2019, <https://gendai.media/articles/-/69396> (2023-7-29アクセス)

- 7) 「シリーズ・現代ニッポンの結婚事情：(3)『逃げ恥』が提示した「仕事としての結婚」－作者・海野つなみさんインタビュー」2018-11-2, <https://www.nippon.com/ja/features/c05603/> (2023-7-29アクセス)
- 8) 海野つなみ『逃げるは恥だが役に立つ』第5巻「後書き」, 2015
- 9) 上野千鶴子「家事労働論争」, 上野千鶴子『家父長制と資本制－マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店, 1990
- 10) 伊田久美子「解説・『労働としての愛』を越えて」, Giovanna Franca Dalla Costa, 『愛の労働』, 伊田久美子訳, インパクト出版会, 1991. 原著名 *Un lavoro D'more*, 1978
- 11) 「家事・結婚って? 『逃げ恥』に思う」, 『朝日新聞』2016-12-26, 朝刊(東京), 29面
- 12) 山田昌弘『モテる構造－男と女の社会学』筑摩書房, 112-115頁, 2016
- 13) 海野つなみ&Kiss編集部監修, 講談社編『逃げるは恥だが役に立つ公式コミックガイドブック』講談社, 115頁, 2019
- 14) Anthony Giddens『親密性の変容－近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』松尾精文・松川昭子訳, 而立書房, 1995, 91-99頁. 原著名 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism*, 1992

【参考文献】

- ・上野千鶴子編『主婦論争を読むⅡ全記録』勁草書房, 1982
- ・吉澤夏子『女であることの希望－ラディカル・フェミニズムの向こう側』勁草書房, 1997
- ・久場嬉子・竹信三恵子『「家事労働の値段」とは何か－アンペイドワークを測る』岩波書店, 1999
- ・野木亜紀子脚本・海野つなみ原作『逃げるは恥だが役に立つシナリオブック』講談社, 2017
- ・白河桃子・是枝俊悟『「逃げ恥」にみる結婚の経済学』毎日新聞出版社, 2017

【資料】

海野つなみ『逃げるは恥だが役に立つ』全11巻, 講談社, 2013-2020

【映像資料】

- ・野木亜紀子脚本『逃げるは恥だが役に立つ』新垣結衣, 星野源, 石田ゆり子, 大谷涼平, 古田新太, 真野恵里菜出演, TBS, 2017 (DVD)
- ・野木亜紀子脚本『逃げるは恥だが役に立つ：ガンバレ人類！新春スペシャル！！』新垣結衣, 星野源, 石田ゆり子, 大谷涼平, 古田新太, 真野恵里菜出演, TBS, 2021 (DVD)

